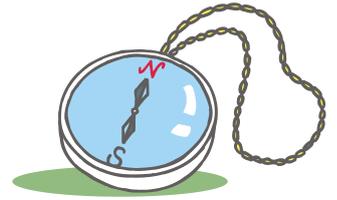


羅 針 盤

第 **30** 号

令和7年2月17日（月）



◆ 「いやいやえん」より

生徒の皆さんは、児童文学作家の中川李枝子（なかがわりえこ）さんという人を知っているでしょうか。作家の名前は知らなくても、著書である作品を聞けば、この人が書いたお話だったのかと思われるかと思います。最も有名な作品、それは『ぐりとぐら』だと思います。青と赤のつなぎと帽子がトレードマークである、双子の野ネズミ「ぐり」と「ぐら」を主人公とする物語で、シリーズの累計発行部数は2639万部を記録している、きっと生徒の皆さんも目にしたことがある作品です。その作者である中川李枝子さんは残念ながら、昨年の10月14日にご逝去されましたが、意外と知られていない素晴らしい作品に、彼女のデビュー作でもあり、厚生大臣賞やサンケイ児童出版文化賞、野間児童文芸推奨作品賞、NHK児童文学奨励賞といった数々の賞を受賞した『いやいやえん』という作品があります。昭和37年（1962年）に刊行されたこのデビュー作には、「ちゅーりっぷほいくえん」「くじらとり」「ちこちゃん」「やまのこぐちゃん」「おおかみ」「山のぼり」「いやいやえん」の7編が収められています。昭和30年（1955年）に、中川さんは東京都立高等保母学院を卒業してからすぐに、駒沢グラウンドの片隅に天谷保子さんが開設したばかりの無認可園「みどり保育園」の主任保母として働き始めました。その保育園での日常の子どもたちとの触れ合いを通じて創作された童話集が『いやいやえん』です。主任保母として迎え入れられた当時20歳の中川さんに、天谷さんは「毎日、全員がよろこんで登園する保育をしてください」と言われたそうです。その言葉を胸に刻みながら中川さんの保母生活が始まりました。保育園で体験されたことが、童話集『いやいやえん』の刊行へとつながっていきますが、中川さん自身は当時のことを「保育園に勤めていなかったら『いやいやえん』を書かなかったでしょう。そして、『ぐりとぐら』シリーズも生まれてこなかったはずです。目の前にいる子どもたちを何とか喜ばせたいと、おはなしをつくったのがきっかけとなって作家にはなりましたが、私自身が目指していたのは日本一の保育をすることでした。」と振り返っておられます。中川さんの目標は作家ではなく、日本一の保育をすることにありました。それでも彼女は、「人はことばによって人になる。ことばを定着させるものとして本がある。」という

強い思いを持って、作品づくりに取り組まれました。みどり保育園の子どもたちと、そのお母さんたちとのたくさんの出会いが彼女を作家の道へと向かわせたようです。ほとんどの大人が忘れ去ってしまっていることですが、幼児の頃は現実と夢が混然一体となった世界で生きています。現実と非現実の境界線が自然と消滅した世界に、幼い子どもたちは生きているものです。そんな世界観を思い出させてくれるような一冊がこの『いやいやえん』という本です。「子どもに面白い本は、大人にも面白い」という持論をもっておられた中川さんの作品から、改めて彼女自身が伝えたかった真理を読み解くことができるような気がします。よりよく成長していこうと日頃から考えてくれている生徒の皆さんにも、是非一度、読んでもらえればと思います。日本一の保育を目指した中川さんが紡いでいる言葉の中からは、本当にたくさんの学びを得ることができるはずです。

